



要点 1 どんな事実をどのようにとらえたか【解答】

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 夕方、次々と街中から集合してくるカラスたちは、広い緑地内のどこでどのようにして眠りにつくのであろうか。明治神宮の場合、夕方飛来するカラスを調べてみると、一旦は周辺の落葉樹などに止まり、時には数百羽で一斉に上空に飛び立ったりしてデモンストレーションを繰り返す。そして、日没間際に、次々とその夜の止まり木へと飛び込んでいく。薄暗くなった時刻に、全身真黒なカラスが鬱蒼とした樹木の中に飛び込んでゆくのであるから、よほど注意して見ていないと飛び込む先がはつきりしない。しかし、方向としてはいずれもシイやカシなどの照葉樹林の高木の中である。

② そととカラスの飛んでいった後を追ってみる。樹高二、三十メートルを越える高木ばかりがまとまって生えている場所に、数十羽のカラスの潜む気配がする。大きなライトで照らしてそとと見上げてみると、樹冠に近い小枝に黒い鳥のシルエットが見える。① 樹木の相当高い場所に止まっていることがわかった。

③ しかし、それもほんの数分のことであった。たちまちわれわれの接近を感じとり、飛び立ってしまった。何羽ものカラスがカー、カーと薄気味悪い声で鳴きながら、すでに日が落ちてすっかり暗くなった夜空を旋回する。飛び立った群れはおよそ二、三十羽くらいである。やがて数十メートル先の照葉樹がこんもりとまとまって生えている樹木の中にバタバタと翼を枝にぶつけながら飛び込んでいく。そこで、カラスの飛び込んだと思われる樹木にそとと接近していく。すると、最初は樹木に止まっている姿をかいま見ることが出来たのに、すぐに警戒心を増し、人の接近を事前に察知して飛び立ってしまう。他の場所に潜んでいるカラスの群れもまた、警戒して人を寄せつけないのである。一カ所で飛び立ったカラスたちのざわめきによって、明治神宮でねぐらをとる数千羽のカラスの全群がいま怪しい人がねぐら内に侵入しているという情報を入手して警戒態勢に入っているかのようである。

④ カラスの集団ねぐらの選定条件として人の立ち入らない緑地の樹木の存在をあ

げたが、中でも常緑樹を利用することが多い。冬季にも落葉せず、姿を隠したり寒さを防ぐのに有効だからであろう。明治神宮内を一巡して分かったことは、パッチ状に分散している常緑樹のあちこちに、数十羽ずつ分散してねぐらをとっていることである。馴れてくるにつれて、カラスの潜んでいそうな場所の見当がついてくるようになる。こんもりとした常緑樹の生える場所に接近すると、案の定バタバタと夜空に飛び出してくる。常緑樹の高所の枝付近であれば、上空からも、また地上からも発見され難い。実によく考えられた場所をねぐらに選定している。

(唐沢孝一「カラスはどれほど賢いか」)

*照葉樹林＝常緑広葉樹林。

*樹冠＝樹木の枝や葉の茂っている部分。

(1) この文章は、何の調査の内容を記したものですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 明治神宮内の樹林
イ 明治神宮内の鳥の種類
ウ カラスのねぐら
エ カラスの警戒心

ウ

筆者が明治神宮に行った目的を読みとる。

(2) 線①「樹木の相当高い場所」とありますが、具体的にはどんな所ですか。文章中から七字で書き抜きなさい。

樹冠に近い小枝

(3) ③段落を、「事実」とその「解釈」とによって前半・後半に分けたときの、後半の初めの五字を書き抜きなさい。

「事実」＝筆者が見聞したありのままのままでのこと。

「解釈」＝筆者の考えたこと。

一カ所で飛

(4) 線②「常緑樹の高所の枝付近」をねぐらに選定することは、カラスにとつてどんな利点があるのですか。④段落全体の内容をふまえ、二点に分けて書きなさい。

例(常緑樹は冬にも落葉しないので)姿を隠したり寒さを防ぐのに有効であること。

例(こんもりとした常緑樹の枝付近なら)上空からも地上からも発見され難いこと。



【解説】

要点 1 どんな事実をどのようにとらえたか

① 話題をとらえる問題は、まず、文章の冒頭に着目するのが鉄則。この冒頭の文は問いかけの形であり、問題提起の働きをする文だということに見当がつくだろう。

・夕方、次々と街中から集合してくるカラスたちは、広い緑地内のどこでどのようにして眠りにつくのであるか。(1〜2行目)

カラスの眠る場所、眠り方が話題になっているらしい。文章全体の中でも「カラス」「ねぐら」はくり返し出てくるので、この問いの答えは、ウが最適である。

ミスポイント 間違えやすいのはア。「落葉樹」「照葉樹」「常緑樹」等の語が頻繁に出てくるので迷うのだろうが、冒頭の、話題を示す文にしっかり着目するようになりたい。イは、文中に「カラス」以外の鳥は出てこないので不適切。エは、文章全体を貫く話題ではない。

参考

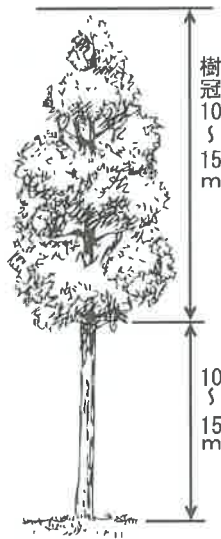
筆者とその研究

この文章の筆者、唐沢孝一は、都市に生息する野鳥の研究者で、『マンウォッチングする都会の鳥たち』（草思社）、『都市に生きる野鳥の生態』（都市鳥研究会・編者）ほかの著書がある。本著では都市鳥の中でもカラスを取り上げ、人工の環境の中で人間の習性をよく知って行動するカラスの興味深い生態について詳細に述べている。

(2) ②段落の中の記述を丹念に読み、筆者の観察した状況をとらえる。答えは——線①のすぐ前の文中に見つかる。

……そつと見上げてみると、樹冠に近い小枝に黒い鳥のシルエットが見える。①樹木の相当高い場所に止まっていることがわかった。(11〜12行目)

ただ、この「樹冠」は「木の頂上」ではない。「冠」の字に引かれてそう解釈し、安易に「高い場所」と結びつけて理解したつもりになりがちなので、語注から正しい意味をつかんでおくようにしたい。



語注を読むと「樹冠」辺りがそんなに「高い」といえるのかという疑問が出てくるかもしれない。しかし、右のように②段落の内容を図にしてみると、そのような疑問も氷解するであろう。「樹高二、三十メートルを越える高木」の「樹冠」付近の高さを正しく把握してほしい。やはり「相当高い場所」なのである。

ミスポイント 「生えている場所」も七字であるが、これだけでは——線①の内容が何ら具体的ににならないので不可。「高さ」や「場所の様子」がわかる表現をおさえるようにする。

(3) 「事実」とそれ以外の文とを区別するには、文末表現に着目するのが早道である。すると、③段落では最後の文の文末だけが「……かのようにである」という推量の表現になっている。そこで、後半に属するのは最後の一文のみではないかと見当がつく。

ミスポイント

迷うのは20〜21行目の一文の扱いで

あろう。しかしこれを「事実」に含めないと、最後の文における解釈のポイントである「明治神宮でねぐらをとる数千羽のカラスの全群が……厳戒態勢に入っているかのようにである」に対応する「事実」が述べられていないことになり、不自然である。

13〜20行目の七文②段落から追ってきた群れの動き。

20〜21行目の一文③それまでは別の群れの動き。

解釈 一か所で飛び立つたカラスたちのざわめきによつて、……全群が厳戒態勢に入っているかのよう

*一つの群れを見ただけでは、最後の文のような解釈は生まれない。

(4) 一点は、——線②のすぐ後に書かれていることをそのままおさえればすむが、もう一点はどうするか。設問文に「④段落全体の内容をふまえ」とあるので、まず④段落を読み返す。すると次のような部分が見つかる。

・中でも常緑樹を利用することが多い。冬季にも落葉せず、姿を隠したり寒さを防ぐのに有効だからであろう。(26〜27行目)

これも、「常緑樹」をめぐらに選ぶことでもたらされる利点にほかならず、ここからもう一点がまとめられる。「冬季にも落葉しない」という性質が、「姿を隠したり寒さを防いだりできる」という利を生む旨を書けばよい。

ミスポイント

④段落全体の内容をふまえ」という設問文のヒントを見逃すと、——線②の直後にしか目が行かず「上空から発見され難い」と「地上から発見され難い」とに分けて答えがち。段落全体に目を配ろう。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 海鳥というのは、鳥の種の数で言って全体の約3%です。大半は地球表面の三割の陸地にすむ陸鳥です。もともと鳥は陸にいたはずで、それが海に進出して行ったわけですね。その過程で、どういうふうに適応し、特殊化していったかといふのは、生物学的にはおもしろいテーマです。(中略)

2 繁殖期に島でカンムリウミスズメを見ていて、非常に印象的なできごとがありました。カンムリウミスズメのヒナは、五月上旬に誕生するのですが、孵化して一日か二日の本当に小さいヒナを、親鳥が岩場の高いところにある巣穴から誘導して、海に連れ出すのを、僕は見たんです。ヒナは小さくても足は大きく、小さいネズミのようにすばやく歩くことができます。真夜中、暗闇の中を、両親が相前後しながら、二羽のヒナを鳴き声で誘導するのです。昼間地上を歩くとヒナも親もカモメ類やハシブトガラスなどに食べられてしまいます。

3 僕は、懐中電灯で親子を弱く照らして見ていました。ちよつと迷子になるとヒナがチーチーと高い声で鳴く。そうするとそれに対して親が声で識別しながら鳴き声を発しコミュニケーションしている。三〇分ぐらいかかって海のそばまで連れて行ったんですが、最後にちよつと高い岩棚があつて、そこからヒナが二メートルくらい、落ちてしまったんです。下は岩です。ヒナはしばらく震えていました。僕は死んだかと思つたのですが、ちゃんと生きていました。二羽とも落ちました。親鳥は先に海に出ていて、ピジュリ、ブジュツ、ジュイジュイなどと鳴いてヒナを呼びます。するとヒナはチーチーと鳴いて応答し、鳴き声はだんだん大きくなります。ヒナは海がこわいからなかなか行かないんです。躊躇しているような感じです。親鳥は海のほうから誘うんです。そのうち大波がザツときて二羽のヒナを白い泡で包みこんでさらっていききました。どうなったかと思つたら、沖からチーチーという声が聞こえるんです。ヒナが無事に海に出て、泳ぎ、親鳥のところにとどりついたようでした。

4 あのときは感動しましたね。小さな、小さなヒナが、はじめて海に出て行く。それは、ちよつと情緒的すぎるかもしれないませんが、陸に棲んでいた鳥たちが、はじめて海に乗り出して行くところを再現して見せられているような光景でした。

* 適応 〓 生物が、環境にふさわしいように自らの習性や姿かたちを変えること。
* 特殊化 〓 個別の性質をもつようになること。

(長谷川博「渡り鳥 地球をゆく」)

(1) この文章で、筆者が実際に観察したことがらを具体的に記している段落はどれですか。二つ選び、段落の番号で答えなさい。

見聞したありさまを中心に書いている段落を探す。

(2) この文章で、筆者は観察したことをどのように書いていますか。あてはまるものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の目や耳でとらえた様子をそのまま伝えるように書いている。
イ 特別な道具を使って数値を調べ、その変化を詳しく書いている。

ウ おおむね時間の流れに従って、できごとの起きた順に書いている。
エ できごとの結果を先に、原因となったことがらをあとに書いている。

(3) この文章の構成は、おおむねどのようなようになっていきますか。次の中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 序論—本論—結論 序論 〓 話題を示す
イ 結論—本論—結論 本論 〓 説明を進める

ウ 序論—結論—本論 結論 〓 まとめ
エ 起—承—転—結

(4) この文章で、筆者が読み手に伝えようとしたのはどんな「感動」だと考えられますか。七十五字以内で書きなさい。

例	カ	ン	ム	リ	ウ	ミ	ズ	メ	の	ヒ	ナ	が	は	じ	め	て
	海	に	出	て	行	く	光	景	を	見	て	、	陸	に	棲	ん
	い	た	鳥	た	ち	が	は	じ	め	て	海	に	乗	り	出	し
	行	っ	た	と	き	の	様	子	の	再	現	の	よ	う	に	思
	れ	た	感	動	。											

(73字)



【解説】

要点 2 文章の組み立て

① (1) 筆者自身が、物事の様子や成り行きを見て記録している段落をとらえる。各段落の内容は次のようになる。

①段落 「海鳥」について。

②段落 カンムリウミスズメの親鳥が、ヒナを巣穴から誘導して海へ歩き出したこと。

③段落 カンムリウミスズメの親子が海へたどりつくまでの様子。

④段落 見たことに対する感想。

②・③段落が「観察」を記した段落である。

参考

カンムリウミスズメ



冬羽



夏羽

名前の由来
となつている
冠状の羽毛は
夏季にのみ見
られる。

(2) (1)でとらえた②・③段落に着目し、その書きぶりをつかむ。選択肢一つずつについて、その正誤を検討しよう。

ア「……のを、僕は見たんです」(8行目)などから、

筆者が「目」を使って物事をとらえているのは明らか

そして③段落になると「チーチー」「ビジュリ・プジ

ユツ・ジュイジュイ」など鳴き声の記述もある。筆者

は「耳」も駆使して様子をとらえている。

イ この文章で筆者が使用している道具といえば「懐中

電灯」(12行目)であり、これは「数値」の変化をとらえ得る道具ではない。

ウ 親鳥がヒナを巣穴から連れ出す→岩場を歩く→

海のそばまで行くが、ヒナが岩棚から落ちる→親鳥

が海からヒナを呼ぶ→大波がヒナをさらう→ヒナ、

親鳥のところへ……と、「巣穴」から「海」へたどり

つくまでが順を追って書かれている。

エ「原因」―「結果」という関係づけは見られない。

カンムリウミスズメの親子が海にたどりついたという

ことに対し「原因」など特にはないはずである。

オ ②段落の初めの文は「経過」の説明ではない。次の

「カンムリウミスズメの……親鳥が岩場の高いところ

にある巣穴から誘導して、海に連れ出す」も、全体の

「経過」ではない。この文は、「海を目指して、巣穴を

出た」という「始まり」の場面をえがいたものである。

その点をおさえないと、オを選んでしまう。

入試では

(3) 「序論」「本論」「結論」の意味を確認しよう。

・序論……話題を提示する部分

・本論……説明を進める部分

・結論……まとめの部分

この文章では「海鳥について」の関心を述べた①段落

が序論、「カンムリウミスズメ」の行動を記録した②・

③段落が本論、感想でまとめた④段落が結論にあたる。

参考

起承・転・結 文学的な文章に多い構成の型である。

○起―筆を起す意。つまり書き出しの部分。

○承―起の部分を受け継ぐ意。話題を受け説明する

部分。

○転―方向を転ずる意。今までと別の内容に入る

部分。

○結―結び、結論の部分。

(4) ④段落の初めの文に「あのときは感動しましたね。」

とある。この「感動」の内容をまとめると、

①段落―「おもしろいテーマ」とはどんなことか。

②・③段落―観察したことがら筆者の興味とどう関

連するかとらえる。

④段落の「感動」を生き生きと受け取れる。

キーワード 再現

ミスポイント 「カンムリウミスズメのヒナが無事

に海に出たのを見た感動」というだけでは不十分。実際

に見たその光景と、興味をもって考えていた「陸鳥の海

への進出」の様子とが重なって見えたことが、筆者の感

動の中心なのである。

コーヒー・タイム

読書感想文といえ、小説・物語などの文学作品に

ついて書く機会が多いだろうが、時にはこの文章のよ

うな記録・報告文について書いてみるとよい。今まで

知らなかったことがわかりやすく書いてあるので、新

鮮な驚きを感じられ、かえって感想文が書きやすいも

のである。図書館の棚にはおもしろそうな本がいろい

ろ並んでいるはずだ。また、新聞の記事なども身近な

記録・報告文である。